

イスラエルの遺跡調査⑧ テル・ゼロール発掘 50 周年とその記憶

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

テル・ゼロール発掘 50 周年

2014 年 11 月 29 日、立教大学を会場に、公開シンポジウム「テル・ゼロールからテル・レヘシュへイスラエルにおける日本考古学調査団の 50 年の歩み」が開催された。日本オリエント学会が派遣した調査団が、テル・ゼロールの発掘調査を行ったのは、1964 年～1966 年のことだから、もう半世紀が過ぎたのだ。1964 年には東京五輪が開催され、1965 年にはベトナム戦争にアメリカが本格的に介入し、1966 年にはビートルズが来日した、と書けば時代の雰囲気を感じられるだろうか。1 ドルは 360 円。庶民が簡単に海外旅行に出かけられる時代ではなかった。

シンポジウムでは、50 年にわたる日本の調査団の歴史が、新旧の関係者によって振り返られたが、とくに印象的だったのは、かつてテル・ゼロールの発掘調査に地元から参加したエリ・ヤナイ氏（イスラエル考古局）の追憶だった。当時、遺跡の近くのキブツに住み、14 歳の少年だった同氏は、遺跡の発掘調査が行われていることを新聞記事で知り、ボランティアとして調査に参加した。それまで日本人とは会ったことがなく、また、遺跡の発掘調査についてもほとんど何も知らなかった。シンポジウム会場では、和装の少女の写真が表紙となった古びた本が回覧されたのだが、それは、テル・ゼロールの発掘前、ヤナイ氏にとって日本についての唯一の情報源だった『ノリコさん』という子ども向けの本だった。テル・ゼロールでの体験を契機に考古学への道を進んだ同氏は、やがて、テル・アヴィブ大学で、土器の授業を担当するようになり、兵役後、モシェ・コハヴィ教授率いるテル・アフエクの調査に携わった後、ダビッド・ウシシュキン教授の誘いでラキシユの発掘調査チームに加わり、最後は、イスラエル考古局の研究者としてキャリアを全うした。このようにイスラエルの考古学事情に通じた同氏によれば、テル・ゼロールの発掘調査が、実は、当時のイスラエルの考古学、とりわけ、テル・アヴィブ大学の考古学に大きな影響を与えていたのだという。

イスラエルの考古学とテル・ゼロール

建国直後のイスラエルでは、政府の考古部門とエルサレムのヘブライ大学しか、考古学の教育・研究機関はなく、外国で教育を受けて帰還した第一世代の研究者たちがイスラエルの考古学を指導した。この時期、建国の熱狂を背景として、ナショナリズムと結びついた形で、「帰還」した人々と遠い過去とのつながりを確認する手段として、遺跡が重要な役割を果たし、国家的なシンボルを求めた遺跡の発掘調査が行われ、多くの人々がボランティアとして手を貸した。「国民的スポーツ」と評されるほど、考古学が人々の圧倒的な支持を得たのだ。国防軍参謀長、副首相を歴任した軍人・政治家としても知られるヘブライ大学のイガエル・ヤディン教授が指揮したハツォールの発掘調査（1955 年～1958 年）では、建国後に新設されたテル・アヴィブ大学のヨハン・アハロニ、モシェ・コハヴィなど、次世代を担う若いイスラエル人考古学者が同僚や助手として参

加し、そこで学んだ彼らによってイスラエルにおける組織的な発掘調査の方法が確立された。

ところが、考古学の調査をより客観的なものにして、国家的な関心から解放しようと試みていたアハロニ教授は、ハツォールの考古学的発見に対する解釈がヤディン教授と異なり、ヤナイ氏によれば、発掘調査中の食事の席順ですら意見が対立し、確執が続いていたのだという。アハロニ教授が門下の研究者、モシェ・コハヴィ氏（のちに教授）を、東京から派遣されたテル・ゼロールの調査団の現場管理担当に任命した背景には、イスラエル考古学界内部のこうした事情が存在した。ヤナイ氏の所見によると、テル・ゼロールの発掘調査は、科学的で、国家的関心を持たず、そして宗教から解放された先駆的な例だった。発掘調査は、遺跡の緻密な調査方法が特筆され、純粋な考古学以上の他の目的を持たなかった。また、国家的なイデオロギーとは無縁であり、考古学的に未知の場所、未発掘の小さな遺跡が調査対象となったことも意義があった。ハツォール、メギド、マサダといった建国後の大規模発掘で政治的な解釈が横行する中、テル・ゼロールが純粋な科学の狼煙となり、その方向性に従った。大島清団長がテル・アヴィブ大学をパートナーに選んだこと自体が、イスラエル考古学に対する大きな貢献となったのだと、ヤナイ氏は、自らの半生を追憶しながら振り返る。

ただし、テル・ゼロールの発掘調査がイスラエル考古学の方向性に大きな影響を与え、その後の潮流の起点となったという事実は、50 周年シンポジウムに際して、ヤナイ氏の口から明かされるまで、日本の関係者の間でもあまり知られていなかった。これに対して、ゼロールの発掘調査に参加した金関恕・天理大学教授（当時）が、現地で経験した発掘調査の方法と体制を学んで日本に持ち帰り、弥生時代の集落遺跡として著名な大阪府池上遺跡の発掘調査に際して、「イスラエル方式」として部分的に採用し、それが、高度成長期における大規模開発に対応する発掘調査システムを構築するのに貢献した事実は日本の考古学界では広く知られている。また、イスラエル式の遺跡・遺物記録方法が、埋蔵文化財天理教調査団による天理市布留遺跡の発掘調査で採用された。逆に、こうした事実は、イスラエルの考古学界ではほとんど全く知られていない。

ともあれ、テル・ゼロールの発掘調査は、イスラエルと日本の考古学双方にさまざまに影響を与え、また、その調査組織を母体として、金関教授、コハヴィ教授をはじめ、日本とイスラエルの研究者の交流が継続し、その結果として、後年のエン・ゲヴ遺跡（1990 年～2004 年）、そして、現在進行中のテル・レヘシュの発掘調査（2006 年～）が導かれてきたのだ。50 周年シンポジウムの会場では、調査団の長い歴史を讃え、金関恕・天理大学名誉教授、月本昭男・立教大学教授（当時）に対して、イスラエル考古局からの感謝状がルツ・カハノフ駐日大使を通して贈られたことも忘れずに記しておきたい。



50 周年シンポジウムで講演するエリ・ヤナイ氏



発掘調査中のテル・ゼロール遺跡